2008年4月8日

淀川水系流域委員会
委員長 宮本 博司 様

須藤 明子
日本イヌワシ研究会
事務局長・保護対策委員長

寶馨委員の意見（平成20年2月10日）についての指摘

私は、絶滅危惧種である大型猛禽類イヌワシ *Aquila chrysaetos* の研究ならびに本種の生息環境である豊かな森林生態系を保全する活動を行っている任意団体に所属する研究者（獣医学博士）です。貴委員会の活動については、ウェブページや報道等を通じて拝見しています。長期間にわたって、治水と自然環境保全の共存という難しい問題に取り組まれている委員の皆さま、ならびに事務局をはじめとする関係者の皆さまのご努力に対し、心より敬意を表します。

しかしながら、標題の意見を拝読し、下記のとおり2つの疑問が生じたので、貴委員会の対応をお願いする意見を提出することになりました。なお、今回の意見は、私の個人的な意見ですが、日本イヌワシ研究会の保護対策委員会ならびに役員会におきまして、今後も引き続き、丹生ダム予定地に生息する大型希少猛禽類のイヌワシおよびクマタカ *Spizaetus nipalensis* の生息環境保全の問題について、議論する予定でありますので、どうかよろしく願います。

（1）気候変動などの影響でイヌワシやクマタカが丹生ダムの予定地からいなくなれば、問題が解決すると読める記述について

イヌワシやクマタカなどの希少猛禽類は生態系の上位に位置するとともに、広大な生息環境を有することから、自然環境の豊かさ（生物多様性）の指標生物です。そのため、開発事業による環境影響を評価する際の指標として、これらの種に注目します。

イヌワシやクマタカは、文化財保護法や種の保存法などによって、個体レベルでも保護されている種ではありますが、環境影響評価においては、そこに生息する個体のみの保護ではなく、生息環境に代表される地域の自然環境保全を評価するバロメータとして考えなければなりません。

これは、高度に専門化された知識ではなく、高等学校の理科で教えるレベルの内容であり、「生物多様性国家戦略」においては、一般市民に理解できるように解説されています。

学識経験者として貴委員会に参画している寶委員が、極めて基礎的な知識を持ち合わせていない上に、勉強不足のまま、このような稚拙な意見を文書により出されていることに驚愕しました。

また、事務局による訂正や注釈なども掲載されないままに、この意見が公表されているという状況は、誤った知識の普及につながるおそれもあります。

(2) 「姉川ダムによる甚大な環境影響はない」との記述について

姉川ダム建設時の環境調査報告にも記載があるように、姉川ダム建設の影響により、クマタカ1ペアが消失した可能性が高く、生物多様性の指標種が消失したことから、環境への影響がないとは言えません。

「現地の人の話を聞いて」ということですが、当時の環境調査報告なども確認された上で、このような文書による意見を提出すべきであると考えます。

以上より、2月11日の寶委員の意見の一部は、学術的に明らかに不適切な記述であると思われます。このような意見が、口頭ではなく文書によって、学識経験者より出されている事態に対し、貴委員会による訂正あるいは注釈の掲載などの適切な対応がなされていない状況は、是非とも改善すべきであると考えます。

寶委員の意見（5頁下段）

環境影響の面はどうかというと、完成してから数年経過しているのですが、現地の人の話を聞いてもこのダムによる甚大な環境影響はないように感じました。

これから類推して、同じ姉川流域のもう一つの支流である高時川筋に事業が進んでいる丹生ダムにおいても甚大な環境影響はないのではないかと思います。イヌワシやクマタカのつがいが確認されているようですが、つがいでない「独身」のイヌワシやクマタカもいるはずで、それらがどれくらい生息しているのでしょうか。委員会の中で一度発言したことがあります。気候変動などの影響でこれらの希少な鳥類が、他の府県や流域に移住してしまうことはないのでしょうか。鳥には鳥の「縄張り」もあり、簡単に移住はできないのですが、住みにくければ鳥だって住民票を移したくなるような気がします。（第72回委員会：参考資料1より抜粋）

以上